

第1章 医学系総合実験研究棟II期改修に 伴う埋蔵文化財発掘調査の成果

第1節 調査の概要

この調査は、徳島大学医学系総合実験研究棟II期改修に伴い平成18（2006）年4月17日から平成18年7月25日までおこなわれた。調査面積は324平方メートルである。調査は徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 定森秀夫総合科学部助教授）が実施した。調査担当者は、中村豊（大学開放実践センター助手）、中原計（埋蔵文化財調査室助手）で、重見美緒子、板東美幸（以上施設マネジメント部技術補佐員）がこれを補佐した。

第2節 歴史的環境

庄・蔵本遺跡は、徳島市庄町・蔵本町に位置する（第1図）。国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、全域が、埋蔵文化財包蔵地の指定を受けている。時代的には縄文時代後期中葉から弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代から江戸時代にいたる複合遺跡である。さらに、近代には陸軍第43連隊の兵営として機能していたこと也有り、戦跡関連の遺物が出土することもある。なかでも、弥生時代前期の遺構・遺物は豊富に出土しており、初期の灌漑水田稻作に基づく集落として、各界からの注目を浴びている。

周辺の遺跡としては、縄文時代晚期後半の遺物が多量に出土した三谷遺跡（南佐古6番町）、庄・蔵本遺跡の東南に隣接し、ほぼ同じ内容の南蔵本遺跡、西に隣接し、弥生時代前期末および中期後葉の集落址である南庄遺跡のほか、弥生時代中期後葉・後期後葉および鎌倉～室町期の遺跡で、埋納銅鐸で著名な名東遺跡が存在する。

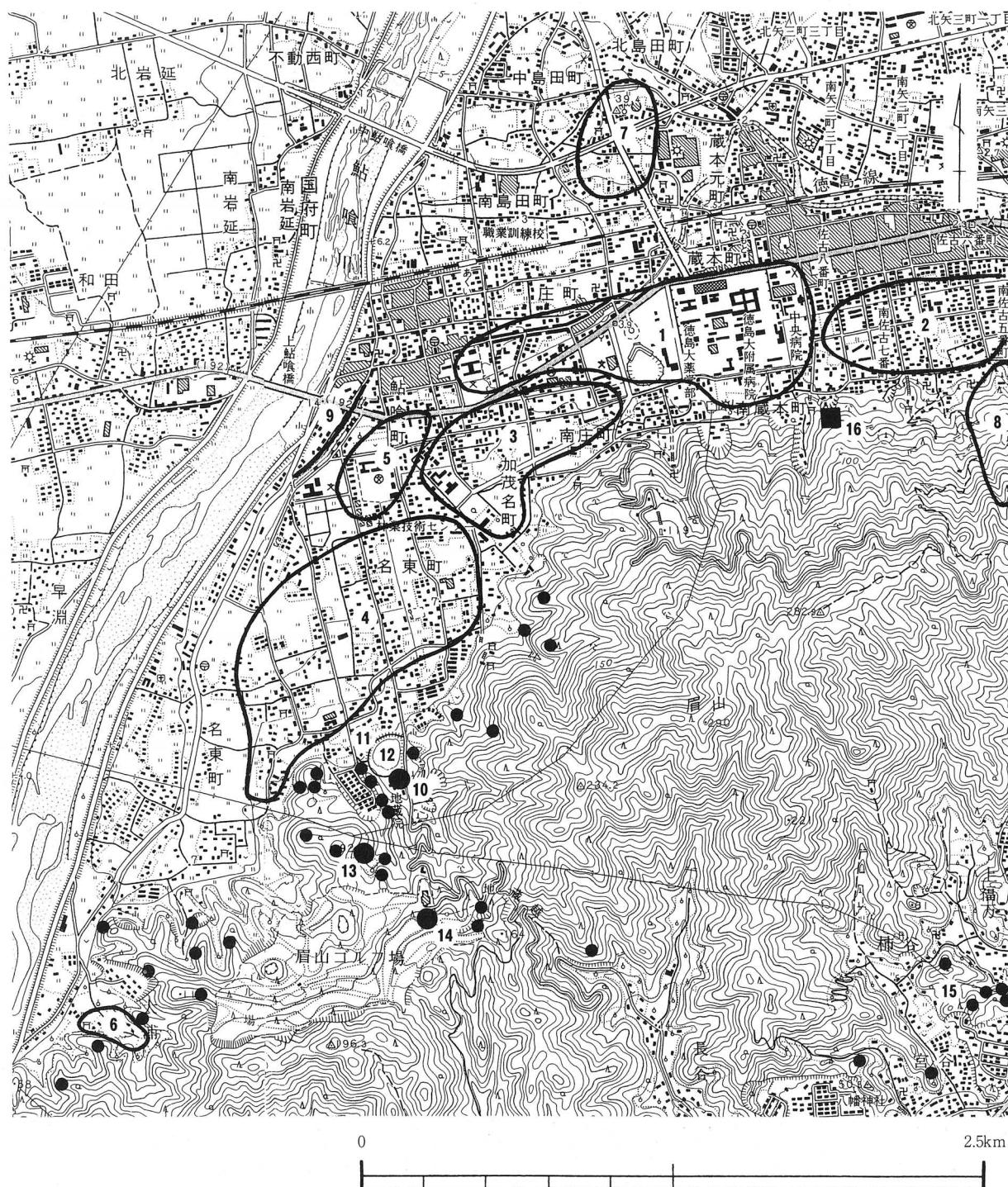
第3節 既往の調査

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスでは、今日までに、22次にわたる調査を実施している。すでに、今までの調査で、弥生時代前期を中心に全国的にも注目される成果を蓄積してきている。例えば、第6次調査では弥生時代前期の墓域を調査し、第1～3、15次調査では貯蔵穴、土坑群を調査している。さらには第5・7・9・10・13・16次調査では用水路網、第17次調査では水田址と、弥生時代前期の集落像を、ほぼ復原しえるほどの成果をえている（第2図）。

今回の調査地点は、その第19次調査に相当する。既往の調査からみて、本調査区は、居住域よりも低地に相当するため、生産域検出の可能性が予察できた。

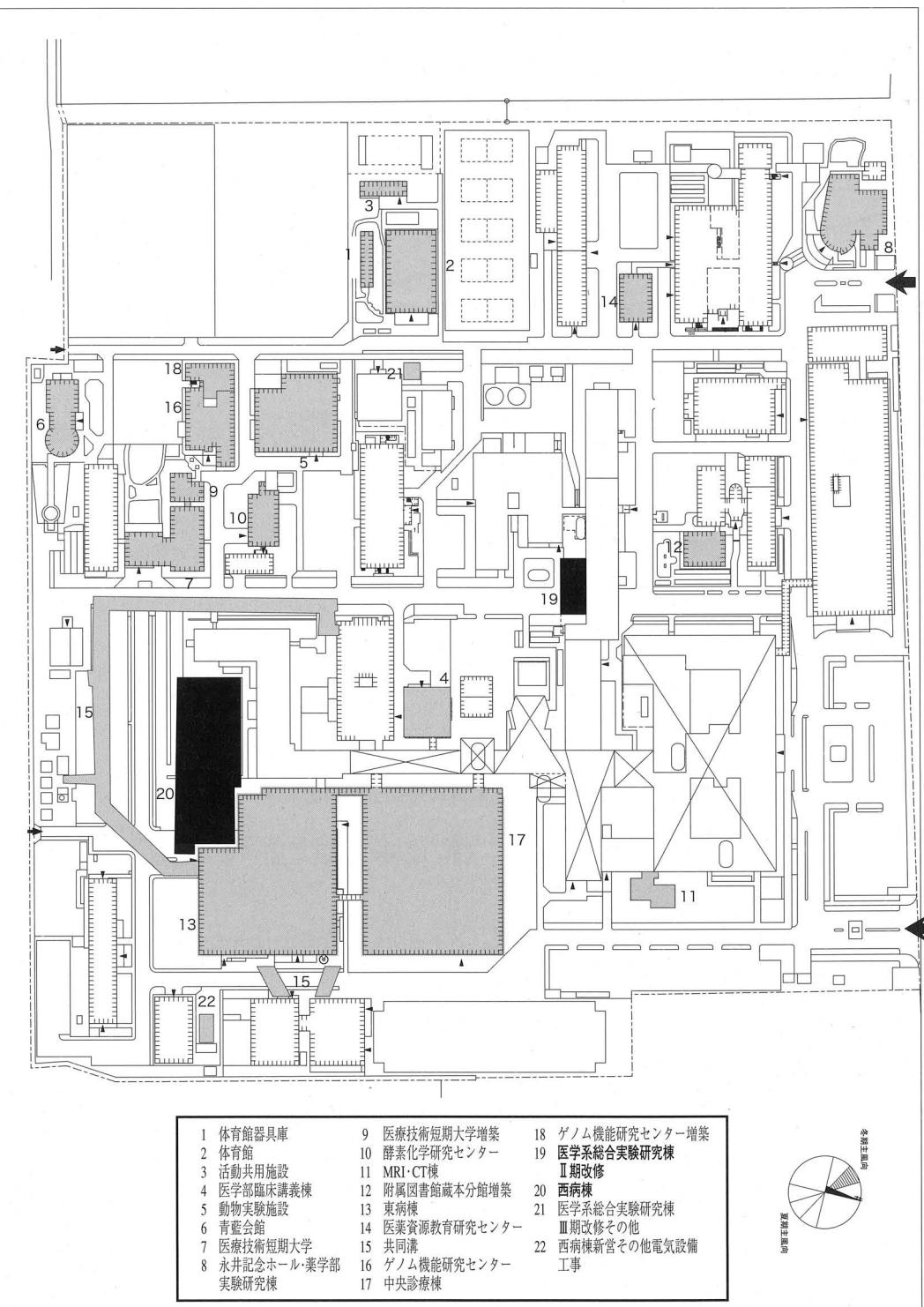
第4節 調査の成果

本遺跡では、現地表下に、1近世、2弥生時代前期末・中期初頭～中世、3弥生時代前期中葉の、概

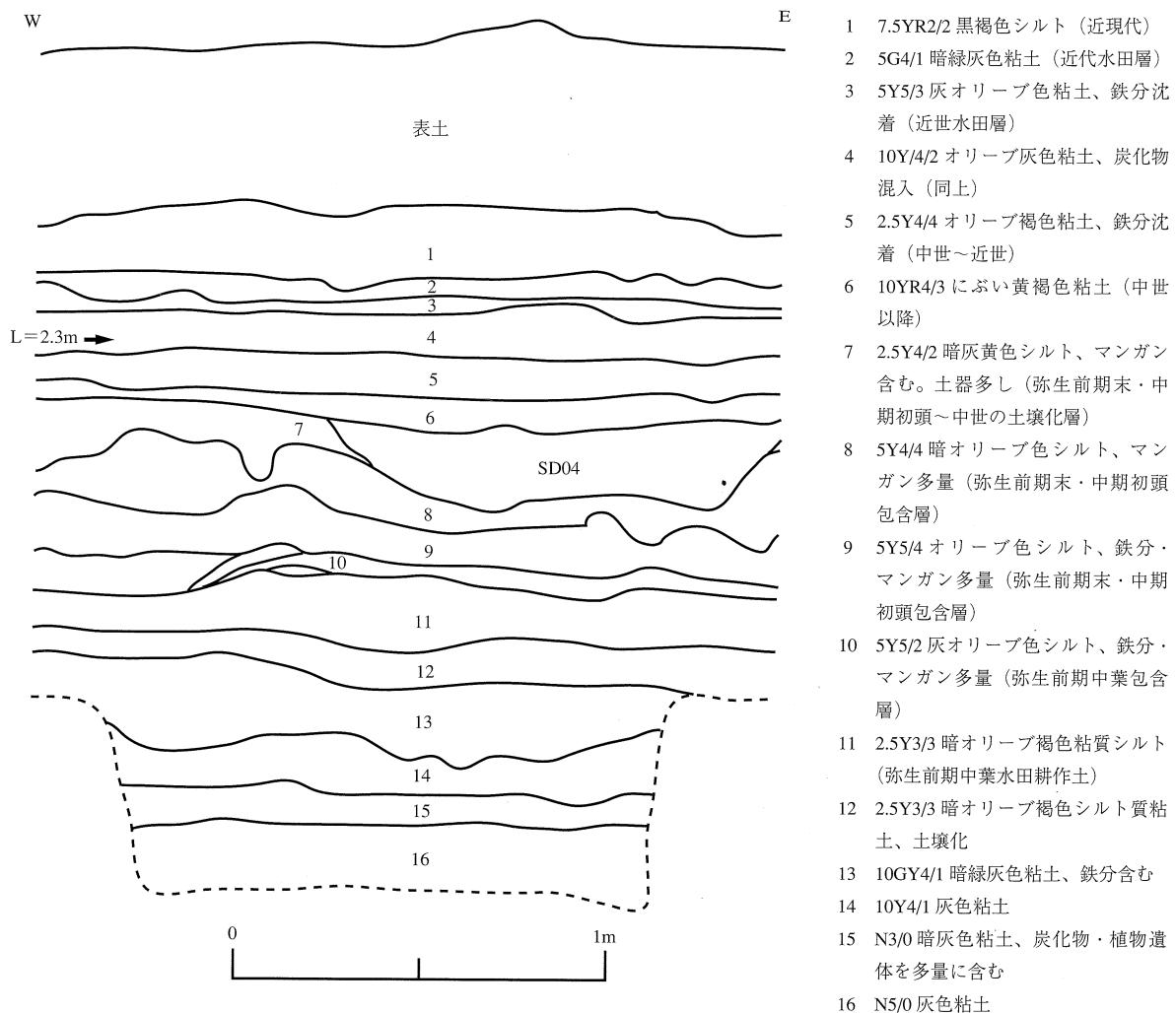


- | | | | |
|----------------------|---------------------|------------|--------------|
| 1 庄遺跡（蔵本遺跡、南蔵本遺跡を含む） | 5 鮎喰遺跡 | 9 袋井用水の水源地 | 13 うばのふところ古墳 |
| 2 三谷遺跡 | 6 大浦遺跡 | 10 穴不動古墳 | 14 八人塚古墳 |
| 3 南庄遺跡 | 7 中島田遺跡 | 11 節句山1号墳 | 15 福万谷1号墳 |
| 4 名東遺跡 | 8 徳島藩主蜂須賀家墓所（万年山地区） | 12 節句山2号墳 | 16 佐古城跡 |

第1図 調査地周辺の遺跡



第2図 調査地の位置 (S = 1 : 3,000)



第3図 医学系実験研究棟土層断面概略

ね3枚程度の遺構面が存在する（第3図）。以下、順に成果の概要を述べることとする。

(1) 第1遺構面（近世）

最上面では江戸時代の溝を検出した（第4図）。江戸時代の遺構のほかにも、近代の第43連隊に関する遺構などが認められる。

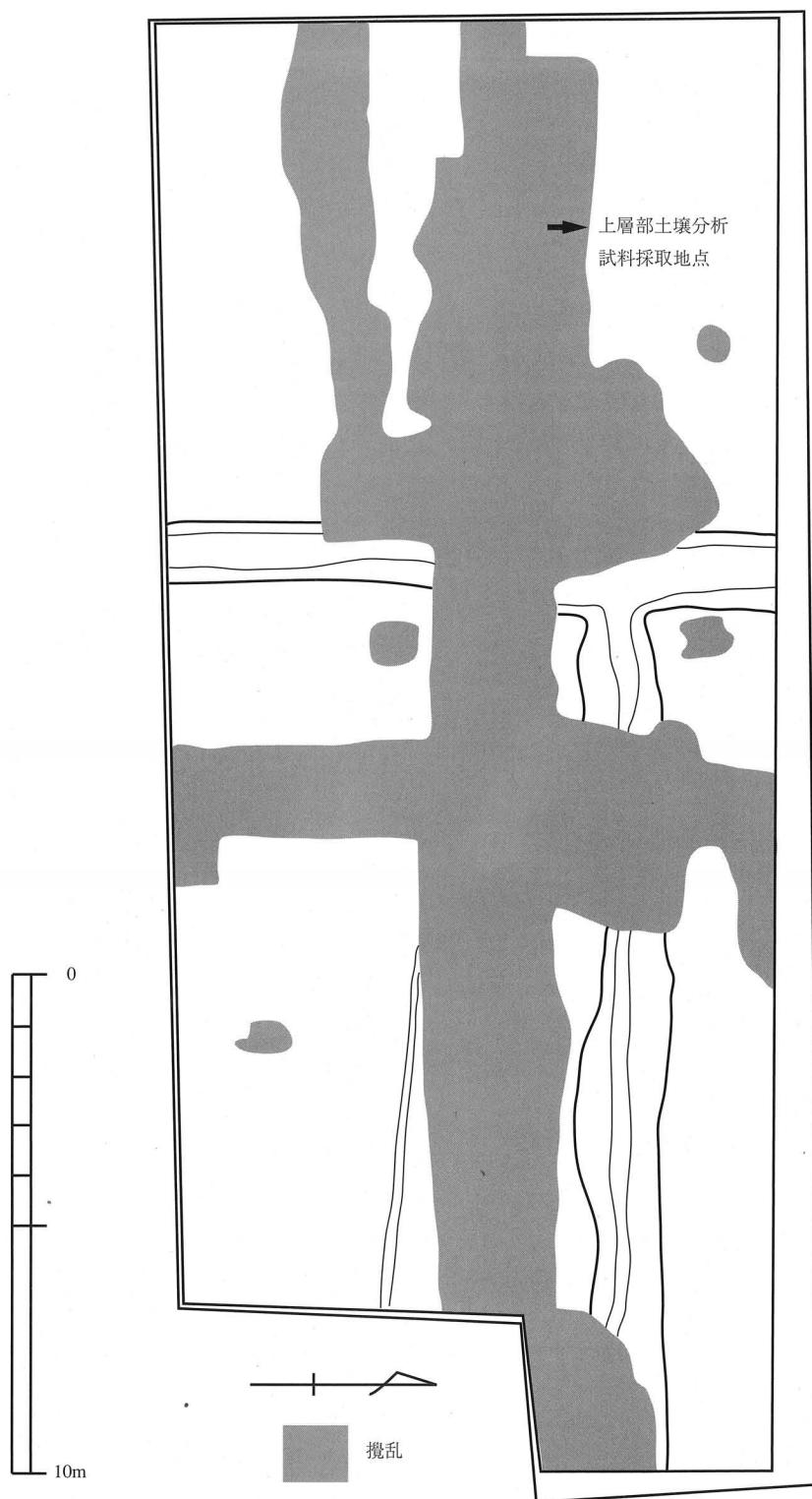
(2) 第2遺構面（弥生時代前期末・中期初頭～中世の遺構面）

第1遺構面のベースをなす第3図7層は、土壤化の進行が著しく、長らく地形環境が安定し、地表面として機能していたことを看取できる。第2遺構面の諸遺構は、本来は第3図7層の上面から掘りこまれたものであろう。しかし、真っ黒で遺構検出できないため、土壤化部分を取り除いた、第3図8層上面にて検出した。

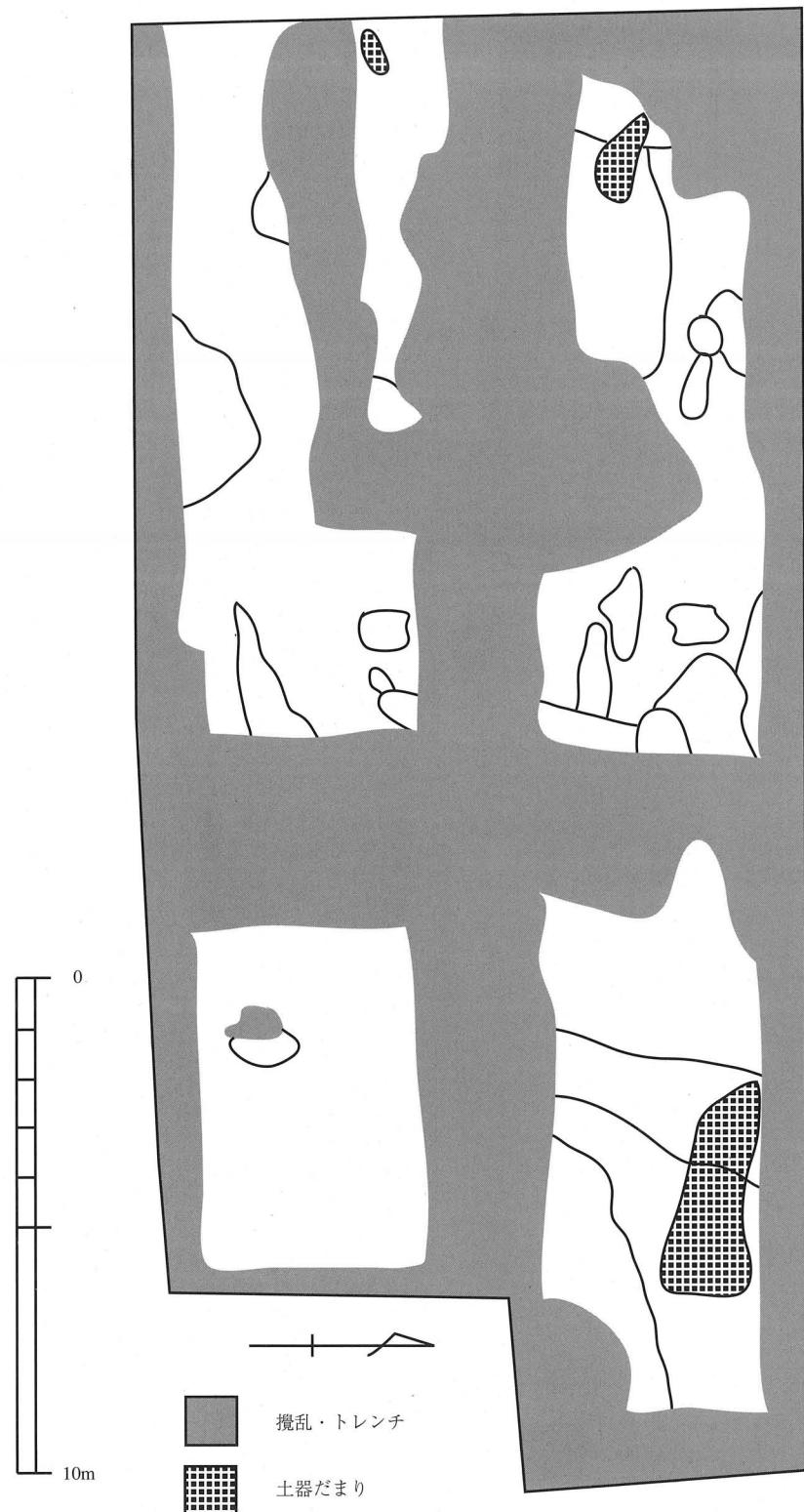
今回の調査では、弥生時代終末期の土坑、10世紀頃の溝を検出している（第5図）。

(3) 第3遺構面（弥生時代前期中葉の遺構面）

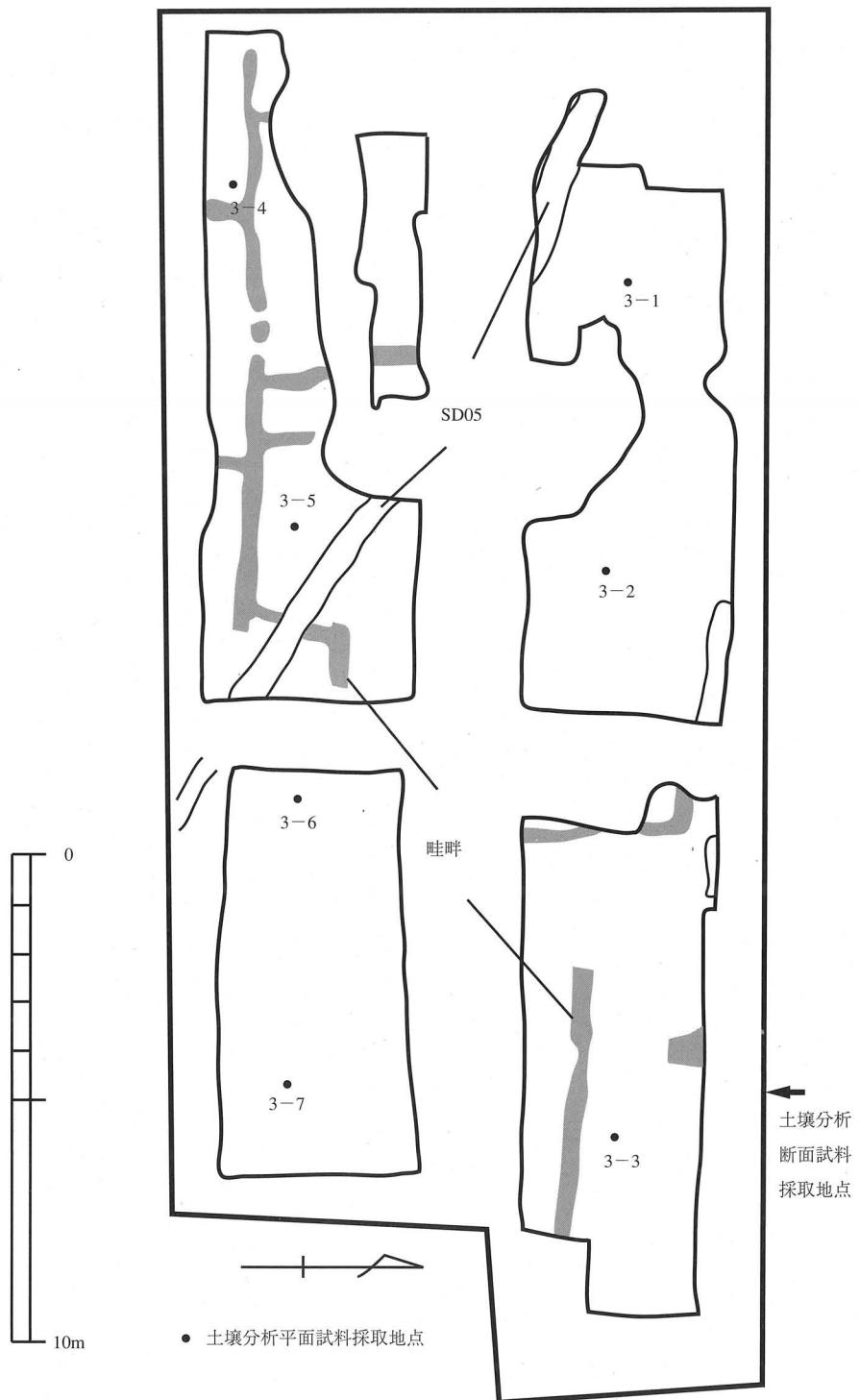
第2遺構面のベースは、厚さ30～40cm程度の細砂層（第3図8～10層）からなっている。これを除去した結果、弥生時代前期中葉の小規模な用水路と、小区画水田にともなう、小畦畔を検出した（第6図）。弥生前期中葉の溝は、これら畦畔を壊しており、両者が有機的に機能していたわけではない。



第4図 医学系実験研究棟第1遺構面



第5図 医学系実験研究棟第2遺構面



第6図 医学系実験研究棟第3遺構面

第5節 出土遺物の概要

今回の調査では、遺跡の中心となる弥生前期に生産域であったこと也有って、遺物量は多くない。ほぼすべてが土器で、コンテナ8箱分である。また、近代に陸軍第43連隊だった時代の、表札「対空射撃部隊 岡部隊」とかかれた木簡1点が出土している。

第6節 小結

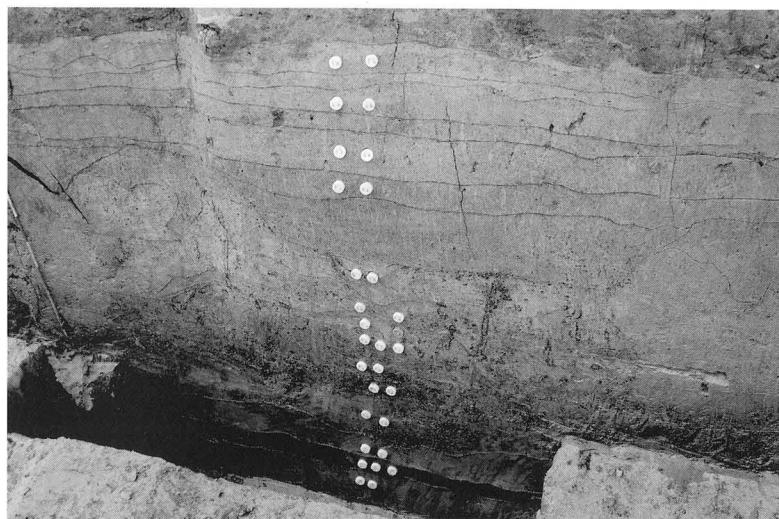
今回の調査地は、調査面積が狭く、また、既存の建物や配管による攪乱が著しかったため、出土資料・検出遺構ともあまり多くない。それでも、第3遺構面より、弥生時代前期中葉の支線用水路と、小区画水田を検出できたことは大きな成果といえよう。

弥生前期の小区画水田跡の検出は、第17次中央診療棟地点に次いで2例目である。これにより、藏本キャンパスにおける、弥生前期の集落景観は、おおむね復原できるようになったとみてよい。

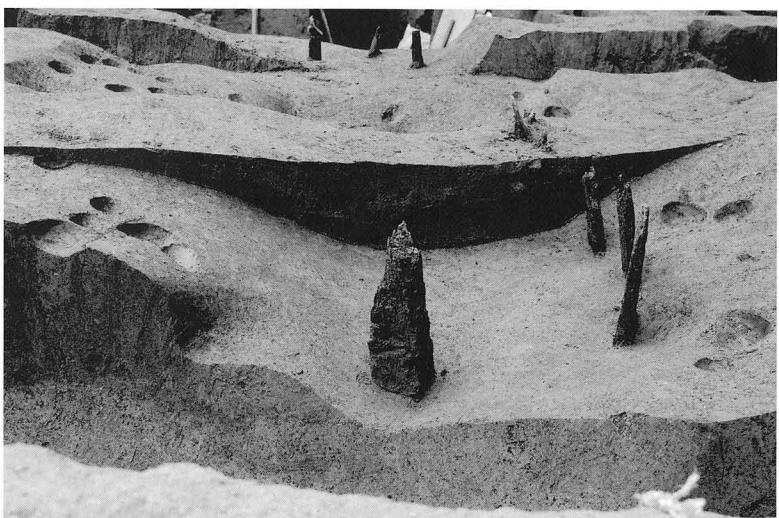
すなわち、第6次青藍会館地点において、当該期の墓域が検出されている。また、第15次共同溝地点の、キャンパス南端付近における東西方向の調査区では、多数の土坑など、居住域に属するとみられる遺構を検出している。これらのことから、キャンパス南端一帯に居住域・墓域が展開していたことがわかる。そして、その北側の第5次動物実験施設地点・第9次医療技術短期大学増築地点・第10次酵素化学研究センター地点・第13次東病棟地点・第16次ゲノム機能研究センター地点においては、旧河道とそれに付随して掘削された用水路多数を検出し、このうち第5次・第9次・第13次・第16次の4地点では合計5つの井堰遺構を検出しており、居住域の北側を中心に、規模の大きい利水遺構が展開していた。

今回の調査によって、この利水遺構の北側に比較的広範囲に小区画水田が展開していたことが明らかとなった。本遺跡のように、日本列島に灌漑水田稲作が導入されたころの集落景観を復原できる遺跡は西日本でもそれほど類例の多いものではない。これらの成果を総括し、列島における縄文時代から弥生時代への変化を具体的に描いていくうえで貴重な資料であることは間違いない。

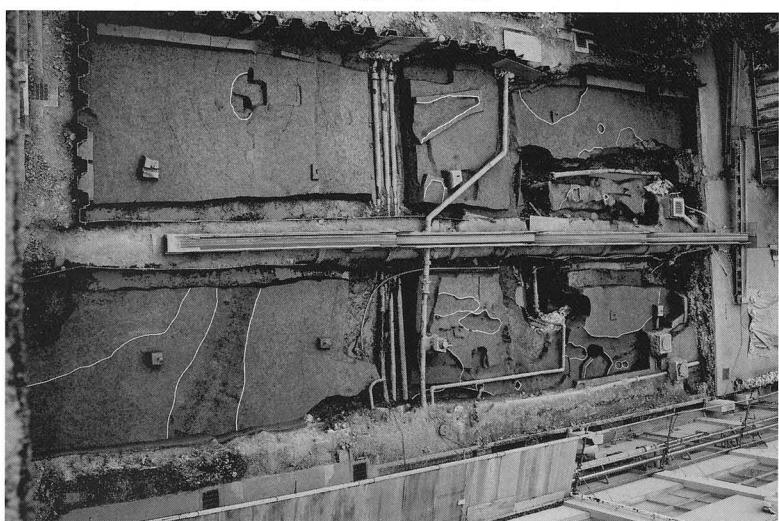
調査にご協力頂いた、河角龍典氏（立命館大学・地理学）に記して感謝申し上げる。



基本層序

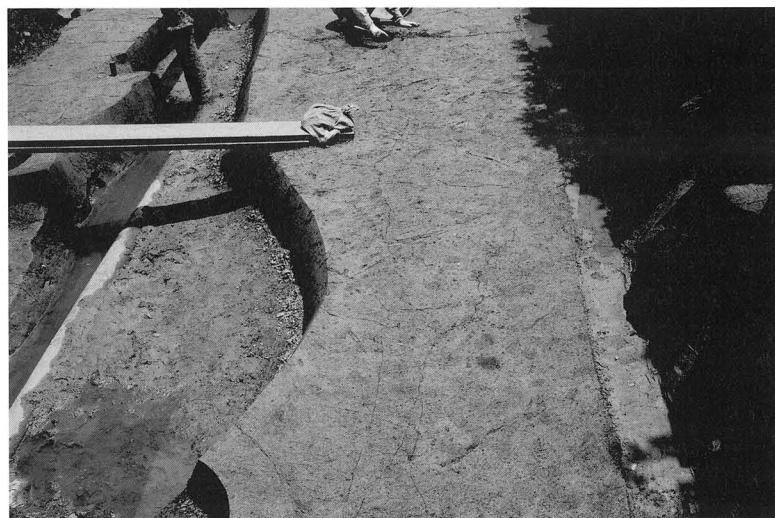


第1遺構面（近世溝）

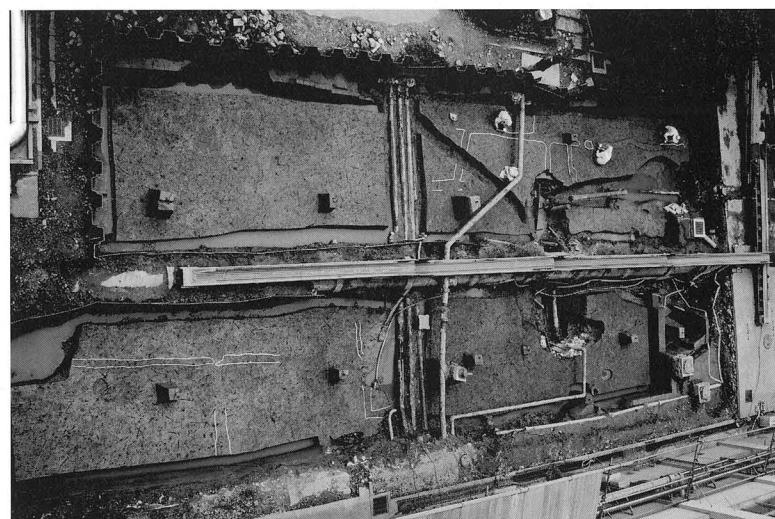


第2遺構面

第7図 医学系実験研究棟写真図版1



水田畦畔検出状況



小区画水田（弥生前期中葉）



同上

第8図 医学系実験研究棟写真図版2